

田辺元博士の思い出

田辺先生について

相原信作

先生が亡くなられて早や一年になろうとしている。十代のなかば木村素衛氏によって先生の存在を知り、「最近の自然科学」や「科学概論」を尊い真理の啓示のように思って、その中の若干の語句をかみしめながら真如堂あたりの道のあるいた少年時代、そしていよいよ哲学科に入学して先生の講義や演習に列する幸福を味わった大学時代。それらは私にとって哲学への初恋の時代であり、先生は——西田先生と並んで——私の精神的恋人に外ならなかった。大学生の私には世界はこの二人を中心に戻転していたのであり、他の何物も目に入らなかったといつても言い過ぎでなかった。その頃の京大にはこの両先生以外にそれぞれ領域においてすぐれた先生方が居られたのであるが、私には殆ど無きにひとしかった。たとえば和辻先生の講義など私はまるで聞こうとしなかった。同じ哲学科でもこのような有様であったから、まして経済学部の上野先生の講義のごとき、多くの学生を集めた名講義であったにもかかわらず私には何の牽引力ももたなかった。

このような人間にとっていよいよ大学を卒業して職業に就くということは、いわば恋愛の夢から世帯生活の現実目覚める

ことを意味した。哲学がパンのたねとなろうとは、予期しないことであった。哲学はパンのための職業となった瞬間に、私にとって魅惑の大部分を消失したのである。哲学とは何かという問題よりも職業哲学とは一体なにかという問題が切実となった。私の田辺先生を見る眼も変らざるを得なくなった。

大学卒業後の三十余年間私は先生との交りを絶たなかった。しかし先生に接近する私には、もはや学生時代の純真さは失われていた。ひたすらに真理の権化のように見えていた先生の著書論文もいくたのぎこちなさやこじつけその他の欠陥を蔵するように思われた。私はそれらについてあからさまに先生と討論するちからをもたなかった。私が先生との間にもち得た重大な問答は身の上相談であった。自分の職業に自信を失った私は一度ならず職業をしりぞくべきでないかの問を先生に投げかけた。しかし人の身の上を案じること深き先生の答はつねに否であった。しかもこの先生の親切に対して私は決してただしく反応したとはいえない。私は、職業一般の有する有限性への感情を先生の上に移しさえしたのである。

私は一昨年群馬大学附属病に先生を御見舞したときのことを思い出す。木造の仮建築のような病舎。その一室に先生は臥されていた。先生はもはや動作の自由をもたなくなっていた。先生には枕辺に附添う妻子眷族は無い。これが声名一世を

庄した哲学者の最後なのか。そのときの対談中たまたまラッセルの名が出て、先生は「ラッセルは哲学者ではない」と言われたが、私にはどうにも先生の運命が余りにも寂しく感ぜられた。病院の窓ガラス一杯にひろがる連山の雄大な眺め、私は先生のためにこれが唯一の贈物であるかの如く思いながら御別れしたのである。

以上のように、少年のころの私にとって天上の星の如く見えたと先生も、私自身が夢想の世界から現実の世間に身をおとすと共に、地上のものとなってその輝きを失い、私をして哲学の果敢なきを嘆かしめたのであるが、今や先生が亡くなられて一年に近く、先生の現身が私から遠ざかってゆくにつれて、私には先生がふたたび少年の私にとってのように天上の星となってゆかれるように思われる。

私は今や先生をあらためて見直す。私が職業哲学の狭い視野で見出した先生の著作の偏向、先生の性癖、かかるものにおいて先生を発見せんとしたことは全くまちがいであった。最後の病室の寂寥において日本哲学者の薄命を嘆いたことも当を得なかった。だが草木の風にたわむ姿をとらえて風そのものであるとすることができよう。先生を理解するためには先生を動かしたはげしい哲学的精神、先生をして寝食を忘れさせ、名利の巷、家庭の囿らんを断念させ、世間普通の社交から遠ざからせた求知の熱心を把握しなければならぬ。この哲学的精神、この求知の熱心のはたとしるところ、職業、運不運は先生の関知するところでない。先生はただそのかよい肉体に鞭打ち、そ

れをこの至高な情熱の跳躍に委ねたのである。

かくて大学卒業後三十余年の久しいあいだ学生時代の純真を失って冷眼先生に対した私も、今ふたたび先生の麗姿を仰ぐことができる。少年の目に見た美しきものこそ先生本来の面目であった。先生は極東の孤島に降り立った哲学の霊でなかったか。このものにつかれて心を狂わせた先生こそ薄命どころかたぐいなきの人でなかったか。愚かな私は今にしてようやく何故多くの秀れた人々が先生に傾倒されたかの理由を納得するのである。

田辺さんの思出

天野貞祐

大正十五年から昭和十九年までわたしは田辺さんの同僚として京大文学部哲学科に奉職した。形式的には同僚だけれども、実質には同時に学問上の師でもあった。わたしは定年退職するまで毎年教授の特殊講義を聴かしていただいた。京大生活における忘れられぬ思出の一つは、その講義と教室の雰囲気であった。いつも火曜日の午前十時から十二時であったと記憶するが、その日には学生だけでなく、近畿地方在住の卒業生も参集し、文学部の哲学デーという賑があった。そこに集まる人達の求めるものは純粹知である。ただ一すじに知識を求めて集まるのである。一切の世間的利害に関係なくひたむきに知識を求め、知識を愛するということの、いかに貴く美しきかを当時わたし達は身をもって体験した。わたし達は感性界をはなれて叡

知界に身をおくが如くであった。

学者としての田辺教授については普く学徒の仰ぎ見る所である。人としての（厳密には学者と人とをわけけることはできぬけれど、しばらく普通の用語法に従う）田辺さんにおいてわたしのも最も敬服した点は謙虚なところである。二十年に近い最も密接した同僚関係において、実際問題についての意見を異にすることはあったが、そういう際にも不遜な態度というものを経験したことがわたしは一度もない。学生や卒業生の人間に対する判断については、当時わたしは厳に過ぎはしなかつた。しばしば感じたことがあったが、今日になって見ると、教授の判断の正しかったことを見出す場合も少なくない。人間性に対する一種の知性的嗅覚とでもいふべき直覚力を持っておられたようである。

昭和二十五年わたしは当時の総理大臣吉田茂氏から文部大臣に就任を懇請されたが、文部官僚は反対だと聞き、当時文部省内に一人の知己もなく、世論にも殆ど就任を勧める意見を聞かず、すべての友人からは強く拒絶を勧められた。ただひとり田辺さんは北軽井沢からわざわざ手紙を寄せられて是非受諾しろという意見である。敗戦直後の文部行政において最も重要なこととは、教育ことに学生に対する理解である、そういう点において適任だと思ふ、「非常な時には非常な覚悟を要す」と激励された。「非常な時には非常な覚悟を要す」という言葉をわたしは忘れることができない。就任早々白線浪人の救済に或程度まで成功し、レッドパージに善処し、有力官僚の反対を受け閣内

一人の積極的支持者のなかつた学校給食維持の主張を固守して譲らなかつたこと、義務教員給与の半額国庫負担法、文化功労者年金法案、私学振興法等々の成立など、田辺さんの期待に添へた点もいくらかあったことをわたしはひそかに自信する者である。

思うに人間形成は人間一生の仕事である。そうしてそれはさまざま方法で可能であるが、大学における人間形成は学問に媒介された人間形成でなければならぬ。世上しばしば旧制大学は学問研究を主とし新制大学は人間形成に専らであるなどという言説を聞くのは理解に苦しむ。新旧のいづれを問わず大学は学問に媒介された人間形成の場処でなければならぬ。この大道が大学において荒廃していることがなければと希うばかりである。わたしはそういう大道を田辺教授について学んだように思う。わたしにしてすでに然り、学生諸君はどれほど教授から学んだことであろうか。教授は実に卓越した学者であると同時に卓越した教育者であった。門下多数の俊秀がそれを実証している。この精神がながく京大哲学科に生きて働くことを期待し願望して止まない次第である。

病床の田辺先生

石沢 要

三十三年頃は先生は今までよりもずっと元氣になられたようである。

「この二、三年来何か重荷がおりたようで、気持が軽くなって

来た。自分のことをいうのは恐縮だが、家内が亡くなってから心の支えがなくなり、その後色々で堪えられなかったようなことがあったが、今は不思議に気が軽くなって来た。これならばまだ何年か生きられるような気がして来た。」

こう語られる先生の語気にはほりがあり、若やいだものがあった。

「そのせいか、この頃田辺は愛人でもできたのではないかなどという人がある。ハハハ……」

といって愉快そうに笑われた。このような軽口が出るのも余程身心の状態が快調だったからにちがいない。その後参上して相変らず元気であったのに、三十六年一月十日脳軟化症というこゝとで急に群大病院に入院されたと聞いてびっくりした。群大の西学長は東北大学時代の同僚であり、母堂が互に親しく交際されていたので古くから別懇の間柄であり、野上弥生子女史からも万一病気の場合は、甥の医学部の台教授ウチノナに連絡するようにとかねがね伝言があった。また最後まで先生の病気恢復に尽力された中尾教授は、同教授と同期生であり親友であったので、群大医学部には縁が深かった。それで先生も急の場合には、京大病院に間に合はなかったら、群大病院へ入院すると云われているというのである。

これから先生の一年五ヶ月にわたる病院生活が始まった。

一、二ヶ月の間は、なれない病院のベッド生活、次ぎ次ぎの見舞客、静な山荘から急にざわめく場所にかわったこと等々で落ちつかれない様子であった。四、五月頃になると病院の生活

にも幾分なれて、病状も安定して来たと共に医局でも積極的に恢復するように色々と治療を試み、先生もこれに期待をかけたようである。

「その窓ぎわにベッドがあるが、その上に椅子をのせて、この頃はそれに腰かける運動をしている。色々と考えて治そうと気を配ってくれている」

と話された。こういう方法の外に、感覚の失われた右手のマッサージも並行しておこなわれていた。併しこの二つの方法は、相反するものらしく、結果ははかばかしくなかった。

「マッサージは痛さを外におい出すが、椅子に腰をかけての運動は痛さを内においこむ。この頃これを続けて来たら、手と足の部分に水がたまり、むくみが出て来た。それで手と足にこんなホウタイをしている」ともいわれた。附添の人が掛布団を除けてホウタイした右手を見せてくれたが、白いホウタイが目についた。こういう状態なので、暑くならないうちに北軽に帰りたいという先生の希望もかなわず、いよいよ病院で夏を迎えることになった。病室は四階の北側で風のある時は比較的のぎ易いけれども、北軽の涼しい夏になれている先生にとつては堪えがたいものとなる。ルームクーラーを考えた人もあったが、この話をもつて行っても恐らく先生は許されなかったにちがいない。後にいよいよ酷暑になった時に、医局に確めた上で、氷柱のことを申出した時先生のいわれたことは

「外の人達も皆同じように暑さに悩まされているのだから、自分ばかりそのようなことはできない」

ということであった。七月中旬ひどく暑い時に伺った時は、流石に先生も何時になくぐったりとされていた。このように精気の抜けたような様子をされたのはこの時だけである。この時は本当に暑さがこたえておられる様子であった。それでも先生は持する所を枉げなかった。婦長が「先生は御自分に厳しい方だ」と驚嘆したのもこのような場面に屢々接していたからであらう。

夏特に悩まれたのはひどい汗モである。漸く九月ともなり秋風が立ち顔色もよく元氣そうになられたから如何かと伺ったら「しのぎ易くなって暑い時分に悩まれた汗モも漸く治ったが、今度は皮膚病ができてきた」と云われた。

夏の暑さのための消耗が秋になってもとれないのか四、五月頃にみられたような治療法も今は中止状態となる。掛布団から出されている左手はすっかりやせ細り、静脈が線を引いたように浮んでいる。悲しい思いに沈む。併しそういう裡にあってても秋ともなれば或る時は神の愛について、或る時は、内在と超越について、また或る時は無限性について語られる先生である。

秋から冬へかけての頃、灌腸をするようになってから胃腸の具合がよくなったのであろうか、目に見えて顔色もよくなって来られたし、長く話される場合にも語氣に力があるように感じられた。併しこの灌腸は仲々の大仕事で一時間半から二時間近くもかかった。十二月頃は右手の動かない以外は身体全体としては、健在の時とかわらないまでになられて、医者立場から

は恢復したといわれるまでになつて来た。

この頃になると先生は病院生活にもなれて来られ病室にもそれなりの落着きと安らかさが出て来るようになった。参上するとその都度この間は誰が来てこんな話をした等と、見舞の人々の名をあげ楽しそうに語られるようになった。入院当時の取り込んでいる時とちがって、人待ち顔というようにもなられた様子である。それで病床にあって思いつかれたこと等を、氣楽にテープコーダーにでもとるようにしたらという議も出て来て、伺いを立てたら

「テープコーダーはその場で興がわいてそれを記録するにはよいが、わたしのように思想がカワイイものには向かない。わたしは一つのことをいろいろの方面から掘り下げて行く型である」

とのことで沙汰やみになってしまった。

寒い折は凄じ易いのであろう。三十七年一月になってからの先生の病状はむしろ順調で快方に向つていくようにみえた。これならばと期待がもてるようになり、病室にも明るさが漂うかのように思われた。それが期待に反して四月二十三日急変して脳軟化症再発ということになった。そうして聞くことはできるが言葉が発することはできなくなってしまわれた。この状態が数日続いた。報知をうけた人々が東京或いは京都から駆けつけた。大きな声で先生を呼ぶと、意識の奥底から僅に応答されるのみとなった。

四月二十八日全く危篤状態におち入り、最早呼んでも応答は

なくなつた。酸素吸入がなされ、先生の大きな息づかいが部屋中一杯にひびくのみ。時々息づかいの途絶えることがある。臨終の当日の午後は、窓の外では赤城の裾野に凄しい強風がごうごうと吹きまくり、高く砂塵を吹きあげていた。天地もまた号泣しているかに見えた。巨星遂に落つ。時に四月二十九日十九時四十六分。

先生亡き今静かにその病院生活のあとをふり返つてみる時、様々な思いがあるが、強く印象づけられた事の一つは一年五ヶ月の病床において、次から次へと身体の苦害に悩まされながら、容色に病衰のきざしを最後まであらわされなかつたことである。病は気からというが先生は少しも気を病んでいられなかつた。身体の病衰は精神のおとろえとはならなかつた。終始一貫していつも精神が優位を保っていた。

病状がはかばかしくなく、やせ細つて血の気のなくなつた腕などを拝見しては胸がつまり、つい悲しさに沈黙するような瞬間があると、先生はそれを感じとられてか、暗雲を払い除くかのようにすぐ哲学の話を始められ熱をおび、時には声をはりあげての御話しぶりとなる。そうして忽ち四、五十分経過することも一再ではなかつた。それで悲しく淋しい思いも何時の間にかぬぐい去られて、先生が病氣であることを忘れ、病室からお別れして出る時には、不思議に心が明くなり、参禅でもした後のようにさっぱりするのであつた。或る時などは余りに晴れ晴れした顔で帰つて来たので、家人から何かあつたのかと尋ねられた位である。

また先生は病氣そのものさえも哲学的思索の対象にされていった。それは入院されて四ヶ月ばかりたった頃のことである。研究室へ電話がかかつてきて、三時頃来いとのこととでその時間に伺うと、二、三の世間話のあとすぐに先生が語り出されたことは、集合論を批判されながら、身心関係についての病床における経験の深い解釈であつた。一見無関係そうに見えるこの二つの問題は、先生においてはその最深の層において相通じているのである。まづ集合論について、

「今日の数学基礎論では、カントリズムの考えによつて、これが連続の積極性が出ていない。ハウズドルフの新しい集合論では、隣りからというがこれでも不十分である。二つの超限の間に要素がまた入ることになる。超限を重ねて行つて極限に到達するのである。それが隣り、あつてことになる。この隣り、ということとは有ではない。隣りは無である。隣りをなくすのである。それでいて隣りを入れるのである。有ではなくて無である。これを表わしているのが法華經の重々無尽というのである。法華經の考では有は無限ではない。有と有とを生かしているというのであるから無が有の媒質になる。ここで次元が高くなる。無の媒質というものが、高次元に高まるということがなければ重々無尽ということとはなりたない。有から無限に進み最高になるところが無の高次元である。そういうことにより集合論の隣りとよばれるものになりたつ」と語られた後で、すぐに意識と身体の関係について次のように続けられた。

「この考を病気に結びつけてみる。このところずっと右手の意識が失われている。それでこの頃毎日治療法として手を痛くさせ、痛さを意識させるようにしている。意識がないのを痛くさせることによって意識させる。無から有をよびますのである。これは重々無尽から意識にもたらずのであるから、意識性と同じ次元のものではない。意識が有として生れてくるのであるが、単に有であるのではなくて無である。無であるような有、あるいは身体を無にしてその無により意識する。無を媒介にして間接に意識するところの有である。重々にくり返す。ここに多次元性の立場がなりたつ。それで動かない手をにぎりしめたいという心が手を動かすように働く。夜の間はそのために手が動く。それが朝になると動かなくなる。」

先生にはこの病床の体験が余程感にたえられたようである。そうしてそこに身心の關係の眞の意義を洞察されたい。夜半は手が動くのに朝になると動かなくなると話されながらハハハ……フフフ……と枕の中に頭をうづめて笑い出された。あまり面白そうに笑われるので、遂ひきこまれて一緒に笑って見たもののその意味を推量しかねての笑であるから空転する。先生のこの深い笑には近づき難いものがある。これを生理的心理学の眼鏡で解釈を下そうとしても届かない。むしろそれはこの場合敵につつしむべきことであろう。すでに先生の立場は、無を媒介とする有たる重々無尽という数学的集合論よりも更に密度の高い哲学的次元において、意識と身体との關係を論じているのである。それは笑いやらんだ後で次のような説明を附

け加えられた所にもうかがい知ることができぬ。

「感覺の欠陥に対して意識だけではどうにもならない。意識と身体との葛藤を通じてその統一を行うところに生がある。」

これは身心両忘の禪定三昧の境より、百尺竿頭一步を進めて身心並行の機を自覚する禪者の悟りにも相通するものがあるのではなからうか。

「哲学通論」の出るころ 石田 仁

私たちが京大哲学科へ入った昭和四年（一九二九年）という年は、田辺先生もまた新たな気持で迎えられる年ではなかったかと思う。前年の夏、西田先生が定年退官されて、「哲学専攻」の授業は最初からすべて田辺先生によって担当されることになったからである。そのためか、先生は私たちに對して何かと心をつかわれるところがあつたのではなからうか。

一年が終り、私たちの専攻がきまると間もなく先生から「クラス会」をやりたいからといひ出され、先生のお宅へ集まるように求められた。そしてこのクラス会は、休暇中をのぞいて、たしかふた月に一度くらいの割合で私たちの卒業するまで続けられた。いつも先生のお宅が会場であり、たいてい夕方近くから集まって、奥様の手づくりの料理をご馳走になった。きまつてお酒がでて、先生自身も私たちと一しよに最初の一二杯は口にされ、あとは愛用の葡萄酒にかえられたように思う。ただ、私たちの仲間には特に才氣豊かという者もなく、結局は先生が

中心になって話しをされ、私たちがそれをうかがうという形になった。そういう場合、ともすれば学問中心になりがちな話題を先生はつとめて日常の事柄にもどされた。内外の哲学者の風格についての先生の感想などは、私には最も興味深いものであった。私たちのための演習のテキストとについて、先生からヘーゲルの「エンチクロペディー」かシェリングの「ブルーノ」のどちらかにしたいが、どちらとも決めるように、といわれて多数決でエンチクロペディーをお願いしたことなども思い出される。

とにかくこの会での先生との身近な接触は、教室での講義と相俟って、私たち哲学志望者の心構えを決定したといえる。私たちはここで、何ものにも甘えることを許されない学問の厳しさと、自分の思想に生活を賭ける哲学者のあり方を学んだのであった。のちに私たちがさまざまな職場へ入った際も、この点では先生はいつも私たちが自分を映してみる鏡であった。そのことがまた私たちの誇りでもあった。この点については、先生と必ずしも思想傾向を一つにしなかった者さえも迷うところが多かった。えがたい師を生涯にもつことの有難さとは、こういうものであるか。学問ひとすじに生きられた先生に、学力の足らぬ私などは気楽に近づきかねて、足も遠のきがちになるのであったが、私たちは先生を「こわい」と思ったことはなかった。また人として理解しがたさを感じたこともない。むしろ、苦渋な道ではあっても、誰でもが努力することによって登ることのできる常人のあり方を先生に見たのである。

当時の先生の思想は、「ヘーゲル哲学と弁証法」(昭和七年)に収められた諸論文に見られるように、弁証法的考え方がしだいに強くなり、実践的性格が著しくなるとともに、西田哲学との性格上の相違が私たちにも感じられるようになった。はたして昭和五年には、西田哲学にたいする先生のきびしい批判が「哲学研究」に公にされた。私たちは、現実を絶対無の自覚的限定においてみる西田哲学の思想にたいして、歴史的現実の非合理と対決する道徳的実践の自覚に哲学の立場を見ようとする先生の立場に、どこまでも歴史的社会的の根柢に身をおき、それを自己の責任として受けとる哲学者の良心の表現をみたのである。この方向はやがて「種の論理」の提唱となつて、先生独自の思想を形成することとなる。

昭和七年、卒業とともに多くの友人は京都を離れていった。卒業式の日、私たちの希望を快く出てこられた先手を囲んで、大学構内で記念撮影をしたことも、写真ぎらいでいられた当時の先生としては珍しいことではなかったであろうか。

二三の友人とともに大学院に残った私に、先生は、先生の普通講義の筆記と整理の仕事をあたらされた。書店の求めもあり、学生の便宜をも考えて、「哲学概論」を本の形にしようと思うから、とのことであった。すでにいづくたびか聴講した講義ではあったが、骨の折れる仕事であった。よく知られているように、先生は概論の講義にノートは用意されず、一枚の紙片のメモをたよりにかなり早口に進められたからである。この年の講義は例年以上に力のこもったものであった。いきおい講義も

おくれがちで、「哲学の立場」と「哲学の方法」の二章が終るころは、もう夏休みに入ろうとしていた。その夏先生は、たしか北軽井沢でこれに「哲学の区分」の一章を書き加えられて、当時刊行中の岩波講座「哲学」に「哲学通論」として載せられた。先生の概論としては、これに認識論（認識の起源、構造、対象）と形而上学（実在の量的規定、質的規定）とがつづくのである。つまり「哲学通論」は、当時の先生の概論のほぼ三分の一あまりに当るわけである。先生の概論の周到さを知ることができよう。私たちは「哲学通論」に代表される先生の思想によって育ち、それをもとにしてそれぞれの考え方を進めたのである。

そのうち私自身も、戦争の期間をはさんで長年京都を離れることとなり、先生のその後の著しい実存哲学への接近、宗教的性格の深まり、そして「田辺哲学」の成立については、語る資格をもたない。ただ、私のうちに刻まれた先生の人間像は、折にふれていただいた温かい励ましの言葉とともに、私にとって、は、いくたびか崩折れようとする心の支えであった。それは先生亡きいまも渝ることがないのである。

片雲

植田寿蔵

大正七年の八月であったか、少しはつきりしないが、「哲学研究」の次号の編集に、いろいろの事情で原稿が集まらず、私にはじめて困った。やむを得ず或る故人に、メ切を七八日も延ばして、しかしそれ以上に遅れると、発行に差支えることを呉

田辺元博士の思い出

呉も話して、確かな承諾を得てようやく安心した。約束の日の正午過ぎにその家を訪ねて、原稿を頂きたいと取次へ云うと、当人が玄閣へ出てきて、何の原稿ですかとふしぎそうに云う。

私は驚いて約束の事実を話すと、原稿はできませんと云う。先日もよく申して置いたとおり、その原稿が貰えなくては、甚だ困るよしを云ったが、何と云われてもできませんと突つ跳ねた。私はいかねてから、編集についてどんないやなことがあつても、感情を外へ表わさないことに決めていた。しかし胸中の動きまでは抑えかねた。この背信に、四十年を経た今日もまだ忘れ去らない軽蔑と、それに伴う一抹の憐みを感じつつ研究室へ帰つて来たが、困るのは編集ができないことである。ひどく遅れるか、事によると一と月休刊かの窮境に突き当って、椅子に掛ける気もつかず、杲然と机の前に立っていた。研究室の周囲には何の音もなかった。そこへふと廊下の端から靴の音がしてきた。西田先生だなど思うまもなく先生がはいって見えて、仙台の田辺からこういうものを送ってきたが、都合のつく時に載せたらどうかいと云って、都厚い原稿を机の上へ置かれた。

何年かたって、或る日の教授会がはじまる前に、私は田辺さんと閑談をしていて、このことを話し、今更のごとくしみじみとお礼を云った。田辺さんも、そんなことがあったのですかと、感慨をこめたように答えられた。

教官室の円卓で諸君と話していると、私は突然、少し腹痛がした。あ、腹が痛くなってきた。盲腸かなと云ったが誰も取り合わない。すると田辺さんが笑いながら、盲腸じゃありません

よと云われた。盲腸の痛さは、そんなことが云っていられるようなものではありませんよ。そんなに痛いですかと云うと、痛いですよと力をこめて云われた。

教授会がはじまる前の、例の私との閑談で、京都の川魚の佃煮が好物だと話された。それを聞いて私は大そう珍らしく、急に親しみが加わるような思いがした。

或る日私の家を訪ねてくれた。少し話があったのだが、それが済んでからも、ゆるゆると、三時間近くも話していられたか。待っていた俵夫が、お客さんはまだおいでになりますかと確めにはいつてきた。いや、もう失礼しますと笑いながら、まだもう少し話しつづけてから立たれた。こういう――少し意外なような――応揚な一面ももっていられたのである。

昭和二十年一月二十四日の教授会へ例の如く出た。会議の始まる少し前に、席を立った落合学部長がまっすぐに私の前へ来て、小声で、きょう田辺さんが最後の挨拶をせられるから、教授会を代表して答辞を頼むと云う。突然云われても困ることだが、田辺さんの退官については、少し前から考えていたので、ともかくそれを引き受けた。それより三月ほど前の、十月二十七日に田辺さんから手紙が来て、来週火曜の午後、研究室へ訪ねるが差支はないかということであった。私は折返し差支はないよしの返事をした。それが十月三十一日に当り、二時頃に私の部屋へ見えた。特別の用事があったのではなく、ただ私が去ったあと、よろしく頼むというようなことで、哲学の教室その他の関聯をもつ教室のことについて、かねてから意中にもって

いられた考えを、いろいろと話された。私の丸で知らないこともあった。田辺さんの考えは大部分私なども同意のできることであった。それまでの教授会でも、私の主張が一部の諸君の意見に合わなかった時々、田辺さんの支持を得たこともある。晩秋のさむぎむとした部屋で、三時間半も話して帰られた。話の内容はここに書くわけにはいかないが、私は話しながら、ただ理的に傑れただけの人ではなくて、よく人を知る人であり、真実に人であり、しかもまた気概の人でさえあることをはっきり知ったのである。

田辺先生と書物

上田泰治

毎土曜日の午後二時から五時までが面会日であったことは周知の通りである。玄関の間に三尺平方ぐらいの書棚があり、二階の面会用の部屋には幅四尺、高さ六尺あまりの書棚があったことも、田辺先生の御宅に伺ったことがある人びとにはまた周知のことである。玄関の間には、パスカルのパンセ、モンテーニュのエッセー、などがあったこと、二階の間では書棚の中ほどにスピノザ関係の本が並んでいたこと、このようなことしか覚えていない。

先生がどのくらい書物を持っていられるか、というようなことが頭に浮んだのは、書物の整理を命ぜられ、実際にその仕事に手を着けてみて、その蔵書の多岐多面、その数の莫大さに、驚き始めてからのことである。武内義範・大島康正の両氏に私

を加えて、空襲の被害から貴重な書籍を守るために、できるだけ重要な書物を選んで安全なところに疎開させる、という仕事に命ぜられたのは恐らく昭和二十年の二月頃ではなかったろうか。そのころの先生は戦局についての見通しを持っていられたのであろう。各地のいろいろ貴重な書物が空襲によって被害を受けるであろうが、自分の書物は自分だけのためだけでなく、将来の日本のためにできるだけ役に立つようにしたい、そのためどうしても疎開して置きたい、という御考えであった。必要な書物を身近に置いておきたい、という御気持から、たとい不便を忍んでも貴重な書物は疎開せねばならない、という御考えに変わったわけである。西田先生は全集をほとんど持たれなかったと聞くが、田辺先生は実に多くの全集を揃えていられた。それはまた他方には、多くの哲学者の肖像画の蒐集と共に、平時ならば御退官後、鎌倉に哲学研究者のための図書館を開きたい、という御心から出たものでもあった。戦争末期のこのころはそれもひとつの夢になりかねなかったのである。

吉田山麓の先生の御宅の一階地半分は、坪数は小さいが実は豊富な一個の図書館であった。玄関の間に続く他の小さい洋室には、主として哲学関係の全集本が所狭しと並んでいた。その奥の八畳に最初入ったとき、壁一面に高く広く並んでいる書物を見たとき、一方では随分の量だなと思ひ、他方ではこのくらいなら一ヶ月ぐらいで整理できるときさえ思つた。

整理というのは先ず、棚から書物を下ろして一列に並べ、先生に見て頂くことである。先生は二階の書齋から下りてこ

れ、書物の列に沿って一冊一冊丹念に見られて、疎開行きのものには列からちよつとはみ出して置かれる。御自分の書き込みが多々あるもの、いま必要かと考えてみられるようなもの、いろいろあつて、列の前に控えている私たちに、この書物の特色、あの本の思ひ出などを語られることもあつた。そして部屋に並べられた書物の列を見終られると、先生は再び二階の書齋へと姿を消されるのである。本当に先生の書物の整理は大変だと感じたのは、書棚の一行を取り出したら、その裏になおぎっしり本が並んでいたのを見出してからである。そしてまた、畳の敷いてない廊下の両側に、先生が作られた書棚がずっと続いていて、しかもその書棚の本をやつと一列下ろしたとき、その裏にもまた本がぎっしり並んでいたのを見たとき、私の驚きは倍加された。先生に本を見て頂くにも、並べる空間がなくなり、並べては積み上げ、下ろしては並べるという仕事、整理の必要部分として附け加わつた。

このような仕事は三ヶ月近くかかつた。その間、いろいろの本に文字通りお目にかかることができた。数学者の喜ぶスプリンガーの黄表紙本、アララギの歌集、大きな画集、映入りの漢詩集、多くの初版や稀御本、いまここでいちいち挙げることはできないが、田辺哲学研究の一翼として先生の蔵書というものを挙げてもいいのではないかとさえ思つたものである。先生がどのくらい書物を持っていられたかは私は知らない。ただ疎開行きとして選び出された書物が馬車で三回に分けて運ばれ、その目方は三百―四百貫だと馬方が私に言ったことで、その一

端が推測されよう。一部は寺に預けられたが、それも結局私の宅に運ばれ、私の家の戸障子が動き難くなり、柱が大分下ったことは、その書物の重量を実証する。しかし私がお預かりした書物はすべて、今は北軽井沢の山荘にある。

整理のとき特に気付いたのは、ヘーゲルの『精神現象学』が三冊もあったことである。土曜日の十時からの演習において、先生がいつも持ってこられたのはブルーの表紙のやや角張った版で、これはラッソンの二版であった。先生から見せて頂いたが、黒・赤・青の三つの鉛筆で書き込みがしてあった。何回も繰り返し読まれた証左であり、先生の御思索の歴史がいくつかの色となって残っており、丸や三角や更に二重・三重丸があちこちに見られる。この本を見た印象は消え去ることはない。昭和八年から十年間続けられた先生の『現象学』演習は、その期間の長さ、演習における先生の御講義内容、と共に、右のラッソン二版本も記憶さるべきであろう。

数学や自然科学方面の書物の中で、全然書き込みもなければ、またほとんど仮綴のページを切っていないものも見つけられた。先生にこのようなことに関して伺ったことがる。西田先生が京都にいられたころは、いろいろ科学関係の書物の名を伺ったり、また相談を受けたこともある。御一緒に読んだのはジーソズの『力学』だった。その後は自分でいろいろ本を買って読み、内容的にすぐれている本が引用したり、批評したりして他の本を買ってみることにした。しかし買ってちよっと読んでみると、一向に面白くないものもあり、そのような本がその

後開いたこともないまま、大分たまっているかと思う。このように話されたと記憶する。科学関係の書物の中には、「往相即還相」とか「絶対他力の行なり」とか、更には「絶対転換」とか、の書き込みがあるページも見出され、始めは全く奇異に思ったこともあるが、このような言葉の書き込みはいわゆる「種の論理」時代のものであると考えられる。

先生は書物の借用には全く几帳面でいられた。時々たのまれて、哲学科の書庫から本を借り出して先生にお渡ししたことがあるが、長くて三・四日のうちに返却された。書庫の本は一般の学生が用うから、迷惑をかけないという御気持でいられた。私自身の本を御用立てしたこともあるが、北軽井沢から一週間ぐらいして送り返してこられたのには驚かざるを得なかった。また、私が昭和九十年代の『哲学研究』を調べていたとき、たまたま先生の論文が切取られているのを発見したことがある。種の論理に属する先生の論文は、『哲学研究』等の雑誌以外では見ることができなかったためであろう。先生は「哲学科の学生が切取るといふようなことをするとどうしても思えない」と歎かれた。自分の本を大切にするのは誰も同じことである。他人の本を大切にするのは道德として当然である。しかし書物というものは、自と他を含み、また過去と未来とを媒介する現在世界のものである、という御気持が先生にあったのではなからうか。

恩師

澤瀉久敬

田辺哲学について、またその哲学を行ぜられた哲人としての田辺先生について、更にはもっと広い意味での人間としての先生の人柄については、ほかに語られる方もあろうかと思うので、私は三十数年にわたって直接教えを受けた一人として、恩師田辺先生の私的な思い出を書かせて頂きたい。

先生に対する私の最初の感謝の念は、私自身の恥を語ることから始めねばならぬ。というのは、私は先生の試験に不合格で再試験を受けねばならなかったのである。古いことで記憶も十分たしかではないが、その試験は一つの大きな問題と若干の小さな問題からなっていた。そして、その大きな問題こそ私には興味のあるテーマで、小問題は哲学概論的あるいは哲学史的常識の有無を検べようとされているように思った私は、第一の問題に全力を尽して、自分勝手な議論を述べているうちに時間がなくなつて、第二問には極く簡単な答しか書けなかったのである。おそらく第一問については私の論述も秀れたものではなかったであろうが、第二問の一つ一つに対しても何かは書いたのであるから、もしおなきで及第点を与えようとされるなら、私にもぎりぎりの合格点をつけて下さることも不可能ではなかったかも知れない。しかし、学問の中に感情や、私情、情実を介入させることこそ、先生が最も嫌われたことである。私はい

ま自ら教師となつて学生を試験するに当つて、先生のお心をことしてゐる。

この不成績は私の不勉強に対する厳しいお叱りであった。私の卒業論文がどのように評価されたか、今もって私は知らないが、今は亡きクラスメート杉正俊君が何時か私たち十数名の純哲専攻者のうち三人だけが「優」であつて、その中に彼と私は入つてゐると言つたことがあるが、もしそうだったとすれば、それは全く筆記試験において先生が私に下れた鉄槌のお陰だったのである。

さて、卒業した折、私は郷里の漬物をもつてお礼に上つた。先生は学生からは物を受け取れないとは、かねて噂に聞いていたが、感謝の心を素直にあらわすことは許して下さるのではないかと思つたし、殊に私の場合は、先生に対する私の父の感謝の気持でもあつたので、そのことも申し上げて、おそろおそろその品を先生の前に差し出したところ、先生は「お父様からですか、それでは頂きましょう。鎌倉にいる父が漬物は好きだからすぐ送つてやります」と仰つて納めて下さつた。

大学卒業後二、三年して杉君はドイツに留学したが、かの地に着くや彼は胸を病んでスイスのサナトリウムに療養することとなつた。思いもかけぬ報せを受けて途方に暮れた私は、さつそく先生にそのことを申し上げて、私たち友人としてとるべき処置について先生の御意見を伺つたのであるが、私のその行動を杉君はなじつて、「世界的な学者であられる田辺先生のお心を私事で煩わすとは何事であるか」と厳しく私を非難したこと

は、遺稿『郷愁記』にも明記されていることで、あの箇所は『郷愁記』の中でも特に読者を感じさせるところではないかと思うが、それはともかく、先生は私から事情を聴かれて、私たちには何も仰有らずに、早速金三十円を杉君に送られたのである。当時の金額において、特に学者にとって、それがいかに大金であったかは、ここに附け加える必要もあるまい。

その後、私は『哲学研究』の編集のことで一層先生に近づくこととなった。元来、先生は学生たちには頗るこわい先生であった。秀才の諸氏はともかく、一般の学生や卒業生には、先生のお宅へ上るには一大決心を必要とした。先生は土曜日の一時から五時までを面会時間としておられたが、その面会日に伺っても、雑談などはなく、テーブルのまわりに、或いは人数が多くなると座敷のまわりに、ずらりと坐った訪問者が、それぞれの専門的研究についてお尋ねする質問に対して、一人一人順次、教えられたり、意見を述べられたり、或る場合には叱りつけられたりするその座に列していると、先生の該博な知識と理論の明徹さに圧倒され、自分の不勉強を思うと、先生訪問はこの上もなく勇気の要ることであった。ところが、『哲学研究』編集のことで、私は否応なしに度々お邪魔することとなったのであるが、最初そのことを言い出された際、先生は、自分は体が弱く、他の教授がたのように色々の役につくことができないので、せめて自分でもできる仕事として『哲学研究』の編集委員をしているのであると話された。そうして、今までその実際の仕事をやっておられた服部氏がやめられることになったの

で、「もし君がそれを引き受けてくれるなら自分は委員を続けるが、でなければ自分もやめる」と申されたのである。そのようなお言葉であったから、先生が編集委員をやめられることは伝統ある『哲学研究』にとってこの上なき損失と考えて、自分の無力は十分承知の上で、私はお引受けして約八年間あの仕事に専念したのである。しかし、その仕事を私が始めてからは、先生は編集を私に全く一任せられた。むろん私はどんなことでも先生の御意見を伺ってから事を処理したのであるが、一旦任せた以上は一切私を信頼するというのが、先生のお気持であったようである。上に立つ者の心がまえを私はこうして先生から教わったのである。

色々思い出はあるが、先生は最後に京都を去られるに際して私を呼んで、「どうも君はひとに何となく固苦しい感じを与える人間だ。真面目ということも悪いことではないが、もっとひとに窮屈な思いをさせぬ人間とならぬといけない。実はこれは君に言うよりも、私自身がいつも自分に言い聞かせていることであるが、君にも私に似た性格があるように思うので、別れの言葉として言っておく」と訓された。子を知る、親にしく者なしと言われるその親よりも深く見、篤く憂える師の有難さを、私はこのおり身にしみて感じたのである。

しかし、教え子への先生の心づかいは住む土地が離れたからといって消えるような薄いものではなかった。私も先生の御誕生日には心ばかりの品をお送りなどしたが、それは先生御自身ドイツで世話になられたフッサール教授の誕生日にはお祝いの品

を送っておられると、誰かに聞いたので、私はただ先生のなき
っていることを私も行ったに過ぎない。

先生が辺鄙な北軽井沢の、しかも一番奥まったあの山麓のお
宅で不自由な生活をなさっているのを思う時、教え子たちから
は他人知らぬ無数の真心がよせられたことと思う。教えを受け
た者たちには先生はほんとうにかけがえのない先生であった。
そうして先生はその一人一人をはかり知れぬ愛情をもって見守
り、励まして下さったのである。論文や著書を拝呈することに
必ず読んで激励のお言葉を下さったことは弟子たちの誰もがよ
く知っていることである。私自身は先生から御著書を頂くこと
が怖しかった。益々深まってゆく先生の思索をその著作で拝読
する時、いったいお前たちは何をしているのかと叱られてい
る思いがして、肅然として自分を反省させられたからである。
師として、身をもって範をたれる以上に厳しい指導があるであ
ろうか！

思い出は尽きないが、先生から頂いた最後のお便りのことを
述べて筆を擱こう。それは既に群馬大学の病院に病臥されてか
らの代筆ではあるが、文体は今までのものと全く同じで、文字
通り口述されたものと思う。昭和三十六年秋、病院でお目にか
かった折は、面会時間の制限もあって、極く日常のことしかお
話もなく、かつてこわかった先生もすっかり好々爺になられ
たという気持で引き下ったのであるが、その文を拝見して、先
生の精神には一分のおとろえもないのを感じた。

さて、そのお葉書は、私が博士号を得たことを申し上げたこ

田辺元博士の思い出

とに對するお返事である。もちろん私も博士号を得たことその
ことではなく、私の思想が多少とも哲學的に価値あるものと認
められたことが嬉しくて、ここまで導いて下さった多年の学思
を謝したのであるが、それに対して先生は「名譽は義務を伴う
はず」と訓された。私はこのお言葉を襟を正して拝誦した。そ
れから、この玉簡で先生は私に今後ほもと私自身の思想を展
開するようにとの忠告を与えられた。その他いろいろ書かれて
いるが、先生から頂いたこの最後のお便りは、「お喜びと共に
苦言を呈する次第です」というお言葉で終っている。私は今も
反復してこのお葉書を拝読して御高教を嘯みしめている。そう
して、それと共に、最期まで苦言を賜った先生こそ、ほんとう
に恩師であつたと、しみじみと思うのである。

恩師という言葉を私たちは平常な心なく使っている。しか
し、田辺先生にあつては、言葉はつねに実践と一つであり、恩
師とは何を意味するかということも先生は身をもって示された
のである。恩師という言葉は先生によってその真の意味を嚴肅
に実現したのである。

私はあまりにも自分のことを述べ過ぎてしまった。私事を語
るといふことがいかにかに見苦しいことであるかは私も十分承知し
ている。しかし、立派な師にこの世で巡り逢うことは、プラト
ーンの言葉を籍りするまでもなく、この世の最大の幸の一つであ
る。私たちは幸にして、文字通り田辺先生の警咳に接し、直接
に教えを受けるを得た。しかし、やがて先生の生々しい思い出

は人々の心から消えて、哲学者としての先生と、先生の哲学のみが語られてゆくこととなろう。私は私事を語ることによつて、ありし日の師の面影を少しでも如実に書き残したいと念じたのである。

——一九六二年晩秋——

田辺先生をしのぶ

北森嘉蔵

私が田辺元先生の講義を聴くようになったのは、昭和十三年からであった。先生はこの頃から急激にキェルケゴールに関心をもつようになられた。当時の先生の講義はキェルケゴールのいわゆる *erbaulich* な講義であったといえる。講義が終つて教室を出てゆくと、瞳を感動でうるませていた者の数は、決して少なくはなかつたであらうと思う。

キリスト教への関心も次第に先生の中に育ちつつあった。先生の訪問日は毎週土曜日の午後であったが、あるときその席でキリスト教のことが話題になり、先生が私に誰かキリスト教の神学者の中から推薦してほしいと言われたので、私が P・T・フォーサイスの名前を挙げてお答えしたところ、それからしばらく経つて、先生が東京のある書店あてに、フォーサイスの書物があるだけ全部送つてくれと注文された由を伝え聞いて、先生の熱情に打たれたことを思い出す。

終戦後、先生がさらにキリスト教に近づかれるようになってからは、お便りをいただくこともさらに多くなつた。『哲学入門』補説第三において、〈戦後我國の神学界に「神の痛みとし

ての神学」といふ概念が提唱せられてゐますが、これは既に旧約(エレミヤ記)の中にあるところの、神の痛みといふ概念を先駆とする思想であつて、まさにこの絶対相対の連帯といふ考へに外ならぬと思はれます。さういふわけで私も、これが生ける愛の神といふものを性格づけるのに甚だ適當なる概念ではないかと思ふわけです〉(二〇六頁)と書かれていることは、私を深く感動させた。

数年前、米国ドルー神学校のカール・マイケルソン教授が来日し、帰米後 *Japanese Contributions to Christian Theology* という書物を書いたが、その中に私のことについて一章を割いている。マイケルソンは其中で、私の神学が「仏教的ヘーゲル主義者」たる田辺博士の哲学によつて影響されている、という趣旨のことを書いている。田辺先生はこのことを知られてから、私にお手紙を下さり、マイケルソンによつてこのように書かれて、私がさだめし迷惑しているのではなからうか、という意味のことを書いておられる。

もし私が田辺先生から影響をうけているとするならば、それはどのようなことだらうか、と私自身考えてみると、それは先生から思想の力学 (*Dynamik des Denkens*) ともいふべきものを学んだことだ、と答えることができるような気がする。「思想の力学」とは、奇妙な表現だけれども、ほかに適當な言葉が思ひつかばないので、いちおう使わせていただく。思想が動的 (*dynamisch*) な性格をもつことは、すべてのすぐれた思

思想家に見られることであると思うが、先生との接触は私に思想のこのよらな性格を直接学ぶことを可能にしてくれたように思う。このことは特に先生が思想の歴史を主体的に解釈されるときに、顕著にうかがわれたように思われる。歴史化された思想は、いちおうそこに「静的」に存在しているものであるが、田辺先生がそれらの諸思想を解釈し始められると、静的に存在していたそれらの思想がたちまちにして動的になってくるのである。しかもそれらの思想が動き始めるのは、単に客体的にはなく、田辺先生自身の主体との有機的なかかわりにおいてである。その意味において、田辺先生はすぐれた思想家であるだけでなく、また同時にすぐれた思想史家でもあったと思う。このような「思想の力学」を、私は神学思想史の解釈において先生から学んだ。

先生から私が受けた「影響」の射程は、大体この辺で止まっているようである。これ以上の所では、先生との間には最後まで私は距離を感じたままで終った。このことは先生がキリスト教に近づかれても変わることがなかった。そして私はそのことを率直に先生におたずねしたものである。その焦点は信仰における救い主の實在的他者性の問題と云ってよいであろう。——先生は「懺悔道」から「他力」信仰へと進まれた。懺悔は、自己の主体性に対する徹底的絶望であったはずである。自己への絶望であればこそ、他力すなわち他者たる救い主への信仰へ転じるほかなくなるのである。しかし、私が田辺先生において最後まで

ではつきりと分らなかったのは、この救い主の實在的他者性であった。先生のいわれる「他力信仰」は結局、人間主体の絶対転換的「行」において現成すべき一つの要請のようなものと思われた。救い主の他者的實在を仰ぐということは、先生には非実存的「現象学的」な態度のように思われたかも知れない。実存的態度を徹底するためには、他力の主体の實在性を認めてはならないかのように考えておられたのかも知れない。先生が私たちに残された問題点の一つは、このようなところにもあったのではなからうか。

初めて田辺先生の講義をきいた頃

高坂正顕

私は大正九年に京都大学に入った。田辺先生はその前年大正八年に東北大学から京都大学に移られ、演習にはカントの「純粋理性批判」を使われ、特殊講義は「一般論理学」という題であった。一般論理学という題であったが、むしろ近代論理学ともいうべきものであって、ロッチェやジグワルの論理学がよく引き合いに出された。それまではデューボンズの形式論理学のほかは知らなかった私には思いもかけない新鮮な内容のものであって、論理学に対して非常に興味を覚えさせられた。その翌年の特殊講義は「無限連続の論理」という題であったと記憶する。デデキントとかカントールの名前が出、またコーヘンのインフィニテシマル・メトードなどについても論ぜられた。しかし正直なところ、数理哲学的な知識に乏しかった私には、時

時、ついて行けないところがあった。しかし論旨が極めて整然としていたことは、それでも私によく感ぜられた。その後、先生はスピノーザについて特殊講義を行われたことがある。先生の初期の特殊講義のなかで、私にとって一番感銘の深いものの一つである。スピノーザにおける延長(身体)の問題が中心であったと思う。スピノーザにあこがれながら、どこかしっくりしない気持ちに悩まされていた私は、先生のこの講義で初めて目から敵いを取りのぞかれたように思われて、毎週火曜日のその時間を待ちわびたものである。

最初に記しておいたように、先生の最初の演習のテキストはカントの第一批判であったが、その前年に超越的感性論を終えられ、私が伺ったのは超越的論理学からであった。それは実に緻密なものであって、ファイフィンゲルやコーヘン、またケンブ・スミスのコンメンタールの所説なども批判しながら進められた。私は古典の読み方を初めて教えられたような気がする。私の三回生の時、先生はドイツに行かれたが、帰国後、カントの「判断力批判」を演習に使われた。先生は恐らく直接ドイツの大学で体験された生々としたディスカッションを我々にも期待されたらしい。西谷啓治君を通じてそのような先生の御希望が二三のものにも伝えられた。われわれも多少努力した。しかしわれわれの力はまだ不十分だった。そして結局先生の御期待には添い得なかった。私は今でもそれを恥かしく思い、先生にあいすまなかつたと思っている。

カントに引きつづき先生はフィヒテの「全知識学の基礎」を

演習に使われた。木村素衛君が同書を譚訳されたのは、その影響によるものである。相原信作君と私なども、多少そのお手伝いをさせられた。その次に先生はシェリングを使われたかどうか記憶はないが、やがてヘーゲルの「精神現象学」を演習のテキストに選ばれそれが先生の在任中の最後まで及んだのではなかったかと思う。先生は丹念に、そして恐らく最初から、ドイツ観念論の諸体系を次々に探究される計画を立てていられたのかも知れない。

私が最初先生のお宅に伺ったのは、今では京都の地図もかなり変ったので間違っているかも知れないが、田中のやや北よりの所で、余り広くない街路をへだてて、東側に竹藪のある平屋建の家であった。その時は丁度ギリシャ語の菊地懸一郎君が先にきていられた。先生の講義の一二日前のことであり、菊地君が辞去されたので私もお邪魔になることを恐れてそのことを云って失礼しようとしたら、講義の準備はできているから構わないとお話であった。後年の先生は非常に厳格であられたようであるが、その頃のわれわれはそれほどには感じなかった。それと前後した頃、当時はまだ三条通にあった丸善で偶然先生にお目にかかった。その時先生は、「君は何をやられるのですか」と尋ねられた。私はカントをやってみたいようにも思っていたが、他方、歴史について考えてみたいとも思っていた。私はどちらとも決しかねていたが、先生にそう尋ねられて、歴史の問題を考えてみたいとお答えした。すると先生は、「では歴史哲学をやられるのですか」と云われた。私は先生のお言葉で

私の興味が所謂歴史哲学に向けられているのだということを知りてはつきりと気付かせられた。こんな話が交わされたのが丸善の店の中、書物棚を前にしてである。

その後先生は京都裁判所のわきに居を移された。先生が大思にかかられ、腸を何寸か切りとられたのは、たしかここにいられた頃である。その後のことは他の諸君が詳しく書かれるであろう。私はただ初めて先生のお宅に伺った頃のことを偲んで書かして頂いたにすぎない。当時の先生はキチンとした洋服を着ていられて、正確な足取りで、教官室から講義室に歩いてこられた。三木清君などは先生を仇名して海軍士官などと云っていた。和服を主にされたのはいつ頃からのことか。三木清君と云えば、左右田喜一郎博士が特別講義にこられた時、心理学の講義室で座談会があり、三木君がしきりに左右田さんに喰ってかかる。その時田辺先生が、「その問題はわれわれも大分に論じ合いましたね」と左右田さんに云われたことなども妙に印象に残っている。先生の名著「カントの目的論」は、カント生誕二百年を記念して行われた京都哲学会の公開講演がもたなっている。その講演のあとの晩餐会の席上で、波多野先生が田辺先生に、非常によかったという意味のことを話していられたのを小耳にはさんだとも思い出される。田辺先生と西田先生や和辻さんとの関係は、また改めて深く考えてみたいと思う。しかしこれらの先生方は、今はすべてでない。私には当時の京都大学の哲学科のことがしきりに偲ばれる。

田辺先生の思い出

高山岩男

私が始めて先生の講演に列したのは大正十四年であるが、「カントの目的論」が前年に出ており、先生の立場はカントの反省的判断力であった。私はカントの第三批判をテキストに使われていた講読にも出席したが、先生はヘーゲルの弁証法を発見的論理として強く斥けられ、反省的判断力の立場に止るべきこと、ここを一步出れば批判主義を越えて形而上学に陥ることを度々注意せられたことが記憶に残っている。ヘーゲルの弁証法を發出論理と規定したのはラスクであるが、先生もラスクの見方を当時は是認せられていたわけで、特殊講義も確かラスクの客観的論理とフッセルの純粹論理を対照させて解説されるものであった。

間もなく先生はヘーゲルの弁証法について新しく考え直されるところ共に、發出論理という風の平板な解釈から脱皮され、むしろ極端な弁証法論理家になって行かれた。その始まりが「哲学研究」に書かれた「弁証法の論理」という論文で、この論文は何回かに亘って連載されたものであるが、執筆途中で最初の頃とは考が変わり、遂に未完に終わった論文である。私達から見るとこの論文は先生が悪戦苦闘を重ねられたもので、先生の独自の哲学が始まる第一歩だったと思う。病後の関係もあってか、もう先生は講演でも和服姿にだけなられたが、この頃から特殊講義は非常に晦渋なものになって、私などが始めに聴いた頃の明

快な調子はなくなつた。陣痛の苦と云うべきものだと思ふ。

カントの批判主義からヘーゲルの弁証法に移られるに及んで、先生の哲学的立場の変遷はめまぐるしくなつた。これが當時先生の身辺につきまといつていた私などの偽りなき印象である。この立場の変遷には西田先生の哲学が大いに関係してゐる。田辺先生はいつも西田哲学と対決の構えで、その中から先生自身の立場を築かれるようになるが、この頃がその始めて、反省的判断力から弁証法に移つたかと思ふと西田先生の場所の論理と対決され、「種の論理」というものを云い出された。これ以後が本当に独創的な先生の哲学だと思ふ。

いつであつたか時日は忘れたが、先生が始めてこの種の論理を説く「社会存在の論理」を哲学研究に書かれる少し前のことである。私は散歩中の先生に吉田山で出会つた。先生の散歩の道筋は定まっているが、私もその道筋を相伴して歩いている途中、先生は突如「君は種の問題を考えたことがあるか」と訊ねられた。私は始め「シュ」ということの意味がとれなかつたので、「シユて何ですか」と聞き返したら、先生は「オリジン・オヴ・スペースのスペースだよ」と云われる。私は当時「生の哲学」に同情を寄せ、ディルタイやジムメルなどを口に出し、レーベンを強調しては時々叱られていたのであるが、さて種を考えたかと問ひ糾されると考えたことはない。そこで種の問題は考えたことがないが、種はなぜ重大な問題となるのかと聞き返した。そのとき先生の云われたのが種の論理の着想であると共に、まさしくレーベンに当るもので、それでは種の問

題はレーベンの問題でないですかと突込むと、先生はそうだと答えられた。私はこの情景を今でも可成り鮮かに覚えてゐるが、それはやはり先生は偉いものだと、つくづく感じたからであつた。私などレーベンを考え、西田先生も田辺先生もこれを抜きにして場所と個物、普遍と個体を考えられるのに不満なのであつたが、ただそれだけで、レーベンを類・種・個の種として論理的に処置する着想は念頭に浮ばなかつた。この虚を私は吉田山で突かれたわけで、ただ理窟抜きに先生は偉いものだと感じいつたことを、三十年後の今日もまざまざ覚えてゐる。

この種の論理は新しく絶対否定・絶対媒介の論理に展開されるわけで、私の学生時代、弁証法を斥けられた先生が、僅か数年で弁証法でなければ夜も日も明かぬようになるのは、思えば驚異のことであるが、この弁証法的思索を推進させた一つの動力は昭和始めのマルクシズムの流行だつたと思ふ。三木清、戸坂潤などの人々が先生を刺激したことは争はず、先生も一時は相当マルクス主義の立場に接近せられた。まだ戸坂さんが東京に出る前のことであるが、火曜の先生の特殊講義には大抵出る。帰途一緒に歩くと必ずその講義の批判が出る。その批判はあそこはまだ唯物論でない、ここはまだ観念論だという風の批判で、要するに先生の尻っぽをつかまえて聴講に来てゐる観があつた。土曜の午後の先生の面会日にはこの種の定連が押しかけて議論を沸かした。どうしても唯物論に賛成しかねる私は、先生にまで相当喰つてかかり、「マルクス主義に同情が足りぬ」という批評も二三回受け、いまになぐられるかなと思つた際ど

いことも二三回あった。どういふ風の吹き廻しか、とうとう先生から一度も面前で怒り飛ばされることなく終ってしまつたが、当時の激越な議論は想い出しても懐しい。

先生は政治に関しても一家言をもつ人であつた。ちよつと考えると政治などには関心がなさそうにも思えるが、そうではなく、しかもなかなか政界の裏まで読む方であつた。この裏の読み方は相当複雑で、私などの想像も及ばぬ推理をされ、人の悪い推理だと思われるような場合も少くなかつた。

先生は陸軍が大嫌であつた。海軍には好意をもたれた。私なども満州事変まではまだしも、支那事変以後の陸軍には何とも我慢のならぬ憤りを感じた。その反動としてだろうが、海軍には理窟抜きに好意を感じるところがあり、海軍の尻つべたを叩いて陸軍を制肘する以外道はないと考えていた。この点で先生も私たちも気持は同じだつたと思う。

支那事変も泥沼の如き觀を呈し、対米戦争が避けられないかも知れぬという頃であるが、海軍省の者が私達に協力を呼びかけて来た。この呼びかけには先生は喜んで応じられた。海軍省の人々と、東大の矢部貞治教授をいれて、東京で会合したこともあり、京都で会合したこともあつた。戦況も悪化した戦争の後半、先生は私を通じて海軍に云うてくれとか、海軍を通じて近衛文麿公に意見を伝えるように計つてくれとか申されることが一再ならずあつた。私を通じてのは、私が海軍囑託にさせられており、ときどき上京して海軍省に行くからである。海軍を

通じて私達は普通人よりは戦況について真実を知つていたが、敗戦必至となるや、先生の敗戦後の日本に対する憂慮は深く、殊に皇室、天皇制に対しては頭を悩まされたらしい。ずい分考へ抜かれたと思われ、一文を私は渡されて、海軍を通じて近衛公の耳に入れるよう頼まれたことがある。この一文は、皇室が皇室財産を全部放出して戦後復興の資とすること、これこそ天皇が絶対無たる所以であり、かくしてこそ皇室も安泰たり得るという主旨の論文で、やはり先生の哲学より来るものであつた。

サイパン失陥後敗戦も必至となるや、私は大東亜省の杉原荒太氏などに頼まれ、矢部貞治氏等と一緒に敗戦日本の復興方針を研究するようになった。敗戦間際になればなるほど陸軍のヒステリックな本土抗戦で甚だ危険な仕事であつたが、この研究会で田辺先生の意見を披露して研究の資とした記憶がある。先生の皇室は宜しく全財産を投げ棄てて無一物たれ、これが日本の皇室の真面目をなす所以という意見は、そのときまで私など着想できなかった見解で、流石に偉い考えといたく敬服したものである。残念ながらこの先生の意見は何ら天皇側近の連中には通じなかつたのか容れられなかつたのか、とも角実行されず、アメリカ占領軍から他動的に皇室財産を捨てるよう強いられるに至つたこと人の知る如くである。進んで捨てるのと他律的に捨てさせられるのでは天地霄壤の差がある。思うて未だに口惜しき限りである。

終戦近く北軽井沢に避難せられて以来、先生は唯だ一度を除

いて遂に下界に下りられなかった。夏は天国のような北軽井沢であるが、冬は地獄のような寒冷の高原であり、誰も訪れる者なき雪野原である。いろいろの人が冬分だけでも下界で過されるよう進めたが、先生は結局下りる決断をされなかった。私は先生の本当の気持は次のようであったこと、を先生の話からじかに聞いている。それは、下界に下りてアメリカ兵を見るのが耐えられぬこと。次に敗戦後の日本人の頹廢に直接触れるに堪えられぬこと。最後に——そしてこのことは先生の最も先生らしい面目を見、先生に対する尽きぬ尊敬の念を感じるのであるが——「自分は帝国大学の教授として、日本を今日の悲運に導いた応分の責任を感じざるを得ない。この責任を感じれば感ずるほど、疊の上で楽な往生など遂げる資格はない」ということである。

先生の「懺悔道」の哲学がこれと内面的関係をもつことは、更めて申すまでもないことである。私は先生のこの考え方はよく理解できるつもりでいる。帝国大学に職を擧げていた人で戦後涼しい顔をしている人も少くないが、先生ひとり厳肅な責任感に生きて天下國家に顔を出すことを避けられた境涯は、まことに頭の下ることである。私など先生より若く、また家族を養ふ必要もあつてか、出来るだけ世間に出まいと思ひながら、それも思う通りにならずにいるが、先生の心境はまことに貴いと思う、何の因縁か不思議であるが、私の妻も先生と全く同日、ただ七時間ほど先にこの世を去った。先生の危篤は知っていたが、かけつけることもできず、死目にお会いすることができな

かったのは、かえすがえすも残念でならない、と共に申し訳けなく思っている、

追憶

高橋 稷

田辺元君を知つたのは私の大学時代のことである。東京帝国大学の木造の正門を這入つて植込の奥の右側にある英国風の赤煉瓦の建物の暗い廊下で、寡黙で真面目な顔をした私服姿の学生に時々遭つた。それが理科大学から文科に転じ哲学を専攻することになつた田辺元といふ人であることを友人の誰れかから聞いた。田辺君は一高では私より二年先輩で、大学では一年の先輩となつたのであるが、私は心理学を専攻してゐたので教室で顔を会はず機会はなかつた。一高の同級の哲学専攻の仲間から、同君の噂をきくことはあつたが、親しい交りはなかつた。稍々親しみを感じたのは数年後岩波の哲学叢書の執筆者の仲間となつてからのことである。爾来五十年の間親交を得たわけであるが、本当のことを言ふと友人といふよりも師父に近い感じがしてゐて、親しきよりも畏敬に近い感を懷いてゐた。これは私のみではなかつたと思ふ。その証拠に宮本なども同級の安部伊藤小山などは言ふまでもなく、先輩の上野藤原石原なども呼び捨てにしてゐたのであるが、田辺君に対しては、田辺と言はずに田辺君と君づけにしてゐた。これは、田辺君が天性極めて真摯で、自己を持すること甚だ厳であつたがために、他人をも憚らせるものであつたのによるものであらう。然し、これ

は田辺君が固苦しい人であつたといふわけではない。

卒業後、宮本君は哲学雑誌の編輯に當つてゐたのであるが、其の頃、田辺君は外国の哲学論文の長い紹介を毎号のやうに載せてゐた。雑誌の原稿が足りない場合に、田辺君に頼むと必ず書いて呉れたといふことである。其の頃、私は学会の帰路に、元良先生と話した折、先生に「本ばかり読むでもエラクはなりませんよ」と言ふ言葉を聞かされ、そしてどうすればエラクなれるのであるかを聞き得なかつたので、心迷ひ、読書に対して多少の疑惑を感じて居たのであるけれども、田辺君の勉強態度には感服させられ、及び難いと思つた。それよりも、もつと感動すべきことを田辺君に見せられた。それは、その頃哲学科の卒業生中の錚々たる人々が、波多野精一先生を中心として、ヘーゲルの現象学の輪読をしてゐたのであるが、田辺君がそれを脱退したといふこと、然かも其の理由が自分は英語の先生をしてゐる（田辺君は開成中学に出てゐた）のだから、英語をしつかり勉強しなければならぬ、哲学よりも英語の方が大切であるといふのであつたことである。これは、何事にも不徹底であつた私にとつて、一つのショックであつたと共に、田辺君の一徹な態度に感服し、これこそ獅子は兎を搏つにも全力を用ゐるといふことであると思ひ、私のあれもこれもと求め願ふてゐる雑行的態度を反省せしめられた。私も大成中学校に英語を教へて居たが、英語学者斎藤秀三郎氏の高弟で私の同僚の長谷川康氏が開成でも英語を教へてゐて、田辺君を知つて居り、田辺さんの英語は確かりしてゐると褒めてゐたのを聞いた。それにして

田辺元博士の思い出

も、哲学を断念するのは如何にも惜しいと思つたのであるが、其後間もなく田辺君は東北帝国大学総長の沢柳氏に招かれ、理学部で哲学を講ずることになつたので、内心ホットし、天は人を捨てずと思つた。其後の田辺君の哲学界に於ける業績は天下の知る如くである。私は田辺君の一事に専心する此の態度は学者の模範であると考へ、同君のこのこと、及び市河三喜君の英語研究の態度を学生によく話したものである。

田辺君は夫人の肺患を治すために随分苦心せられ、其の静養方法は甚だ徹底したものであつた。私も大正七年岩波の哲学辞典編輯中に肺尖を犯され静養する必要に面した。岩波君は月給を呉れながら静養させる積りであつたが、月給を貰ふことは義務を感ずることであり、眞の静養にはならぬと思ひ、それを辞り、無収入の身となつて家族と共に鎌倉に転地した。此の決心をさせたのは、宮本君及び同君を通じて伝へられた田辺君の意見に負ふところが多い。田辺君は他人のことも親身になつて考へてくれる人であつた。

前に述べた如く、田辺君は自分に対しては嚴格であると共に身近かに感ずる人にも嚴格であつたが、身近でない人には甚だ寛大な所があつた。それで、同君に著書や論文を贈つた人に対する礼状には、過度と思はれる程の褒め言葉があり、眞の採点は可なり甘かつた。それでいい気になつたりする人もゐた。私自身にも其の経験がある。私の論文集「心理道德教育」の序文を読まれた時、「君は弁証法に反対であるやうだが」と不満を洩らされたが、厳しい批判は与へられなかつた。また「思想」

に載つた「私の学究生活の思出」を読むだ後に頂いた手紙では、私に自伝を書いて見てはどうかと勧めてくれた。これは私が心理学で自由の問題に行詰り、カントの実践理性を読むでそれを打開し得たことや、病氣になつて生死の問題に当面し、アンナカレニナをよみ或る悟りを得たこと、その為め心理学から倫理学に転じ、そして或一学生の質問に示唆せられて自由と必然との矛盾を解く有機的因果の原理を思い附いたことなどを記したことに、興味を感ぜられた為であらうと思ふが、田辺君の他人に甘い一面を示したものであらうと思はれた。然し田辺君の此の自己に蔽にして他人に寛であるのは、人間の不健全なる自虐性の表れとは根本的に異なるものであり、真理を求める念の真摯性の現れ、即ちその道德性の現れである。道德性の根本は佐藤一斎も言ふ如く自己に蔽に他に寛であることであり、カントはそれを自己の完全と他人の幸福を求めることであるとしてゐる。それで、田辺君の存在はすべての真摯なる者への促となり、励ましとなり得たのである。エマソンの論文の中の何処かに心の友といふことを説いてあるのを読むことがある。世には、隣のベンチに腰かけてゐながら一言も語を交すことがなく、然かも互に心が通い合い、相手の心が分る人があるといふのである。私に取つて田辺君は其のやうな人であつた。その存在は心の支へであつた。これは私のみのことではなかつたらうと思ふ。

晩年の田辺元先生の思ひ出 土井虎賀寿

一六二

僕は一度「哲学」から訣別し、「哲学者」といふ自分から脱体しようと思ひ、下村寅太郎君と矢内原伊作君からそれぞれ異つた形で心のこもつた忠告を受けたことのある「前科者」なのである。それ故に、田辺先生の哲学体系については語りたくない。ただこれだけのことを云はせてもらふ。僕は田辺哲学が「現実」といふ曲線に向つて実に尖锐果斷な「接線」を引いた業績を限りなく驚嘆の思ひで仰ぎ見てゐる。これは僕の若い頃から今に至るまで終始一貫した印象である。しかし、その「接線」が「接点」において「曲線」に転換する弾力性をもつてゐるか、否か、については、今でも懐疑的である。それにしても、嘗て「箱根の雲」になぞらへた西田哲学の漂渺とした雲の海だけでは、哲学がとらへ難いプロテウスに化する危険がある。この危険を救ふものは、田辺哲学の鮮烈なタンデントの象徴する「直線性」でなくてはならぬ。

哲学論議は先輩達に一任して、僕は先生との人間的な交渉の思ひ出を、二三ここに書きとめて置きたい。若い頃の僕と先生との人間関係は、理論闘争めいたものにわざはひされて、むしろ正面衝突の場面が多い。しかし、晩年北軽井沢に隠棲された先生との交渉は、僕の生涯を決定するやうな、「理論外」的な、哲学の底にひそむ「祈願」を中心点とする旋廻運動である。僕はどうも、「哲学者」であるよりも「画家」であるらしいの

だが、（下村君、許して下さい）僕をそのやうなものとして遇してくれたのは、恩師三岸節子以外では、多分田辺先生だけではないかと思ふ。（武者小路実篤先生が僕を何者と考へてゐられるかを今は書かない。——）

晩年の先生をお訪ねした折々の思ひ出

一、或る時の先生との問答

「今日は一言も物を云ふな」

「先生、それでは、少し休ませていただいて直ぐ出かけます」

「君のこの「水蓮」の画を見れば、君の云ひたいことはみんな分る。今更言葉に出して、とやかく云つてみる必要はない。ところで、こちらの方の「浅間山」は、左半分だけ欲しい。右はこまる」

「しかし、先生、この浅間は一枚つづきの画ですから……」

「いや、とにかく左半分だけくれ給へ」

二、或る時の先生との問答

「先生、今日は参つてゐるんです。ここへ来る道でイエスキリストを落して了つたのです。十字架が胸のところに着けていないことには、不安で不安でたまらないのです」

「いや、そんなに気にしない方がよい。もつと落ちついて気を静める工夫をし給へ。僕の父は漢学者なので、僕は子供の頃から何かにつけては「工夫が足りぬ、工夫が足りぬ」と云はれて育つた。工夫といふ言葉は、何気ない言葉であつても、大事な言葉だよ。君も少し工夫し給へ。そんな

に気を落さなくてもいいよ。ゆつくり休養して行き給へ」

三、或る時の先生との問答

「先生、先生の肖像画を書きたいのですが……」

「よからう」

「実は、西谷君と話をしながらこつそり彼をスケッチして大変怒られたことがあります。私は、先生のお許を得た上いつこつそり先生をスケッチするかも知れませんよ。先生、お怒りになりはしないでせうね。奇怪な肖像を書き上げて」

「一旦承諾した以上、君の思ふ存分、思ふ時に、思ふやうに書いてくれ給へ。僕の方では何とも思はぬ。何とも云ひはしない」

もう、疲れてしまつた。堀辰雄君の喪式の帰り道に、突然お訪して先生を驚かし、そのためにひどくたしなめられた記憶なども、今では深い忘却の霧のなかに埋れてしまつて、それをそれとしてとり出して来るには大変な努力が必要である。もうそのような努力をするエネルギーが今の僕にはない。そつと心の底の無意識の立ちこめた霧の海に、先生の思ひ出を沈めて置く方が、記憶といふ事柄の本質にふきはしいのではなからうか。努力しととり出した記憶の断片など、実は事柄の自然からそれたいたづらごとではないのか。この原稿も、破つてしまつた方がよささうに思へて来た。しかし、約束は約束だから、とにかく発表させてもらふ。

「先生、怒らないで下さい。発表してはいけないことの方

うな気持が、僕自身にもあるのです。先生に怒られても、それは当然なことなのですけれど。私は、事めんどうと思つた時には、笑ふことにしています。私は今も、笑ひます。先生もお笑ひ下さい。結局、人間世界は、コメディ以外の何ものでもあり得ないわけですから。いつかお話しした花田清輝の世界のほかに人間の住む舞台はありさうに思へません。ニイチェだつて高い峰に立つて見下しながら、人間どもの愚かな仕種を笑ひに笑つて呼吸がつまりさうになつています。」——一九六三・一・一七・深夜——

記録の断片

野上弥生子

一月二日 月 晴

まだ咳きが完全によまず、からだの調子もわるいので年賀のお客さんにも失礼して、かたばかりのお昼飯をすますとベッドに横になつてゐた。そこへ家政婦の上さんがいつもの通り階段の踊り場までのぼつて来ると大きな声で、北軽の安東さんからお電話です、と取りついで。私ははつとして飛びおき、茶の間に駆けをりて受話器をつかんだ。先生が昨日からかき、脳溢血、右手は利かないが気分はたしかで、言葉にもまだたいした支障はない。長野原の医師が来診。先生はお弟子さん方にも知らせるなど仰しやるが、とにかく私だけには内報する。——これが大学村事務所の安東さんの電話であつた。

私は電話口に立ちすくみつつもつつさの決心で、この際は群

馬大学の台さんに相談するのが一番よい方法だと考へた。それで前橋のお宅に電話するとお正月も二日のことで、家であつたしくのんびりしてゐたらしい彼が、かういふ大事がおきたので、どなたかそちらの病院の先生で北軽まで行つて貰へないであらうかとの私の要請に対し、早速適当な人に話して見ませうと答へ、それに附け加へて、小母さん、僕もいつしよに行きませうといつてくれた時、優しい心遣ひのうれしさに誘はれられて、その瞬間まで張りつめてゐた胸がふとゆるみ、私ははじめて涙をこぼした。

念のために書けば台さんは精神科の教授で、三四年まへ松沢から転じて来たのである。また私が先生の病氣を知つた時、いふならば畑違ひである彼にまつ先きに縋らうとしたのには理由があつた。それを話しておくことは先生の御発病から最後の場所となつた群馬大学にからまる、なにか因縁ともいふべきものを明らかにすることもあるから省かないで書いておかう。

毎年冬、お講義にも切りがついていよいよ帰京としまると、私は先生のところへ来年の初夏までのお暇乞ひに出掛け、どうぞ御大切に、と申すと、それまでにひつくり返つてゐるかも知れませんが、と冗談めいて仰しやるのがこの一、二年のきまり文句であつた。それをきくと私は、その言葉は私もさうなり得ることを意味するわけだから困ります、と抗議した。先生と私は誕生日に三ヶ月の違ひこそあれ同じく明治十八年生まれなのだから。昨年も十一月三十日に下山した前日、同じやうなやり取りをしたあとにつけ加へに、ほとんど無医村にひつしいこの

山居で病気になつたら、かうかういふ手筈にしてあると私は台さんのことをうち明けた。彼は次男のMとは東京高等学校の尋常科からの親友で、私も若い友だちとして尊敬と信頼をもつてゐる。ところでちやうど群大に転じたのを幸ひ、いざといへば駆けつけてくれる約束だから、そんなことがあつてはならないが、万が一にも先生のおからだの工合では私の名前をいつて聯絡なさつて下さい。彼はすぐ来てくれるに違ひありません。この私の言葉に対して先生もかつて何はない思ひいで話をされた。それは群大の西学長は外神田の小学校での同窓であること、土地柄で商家の子供たちばかりの中では、その二人の小学生は様子の似通つたところがあつたことを一種回顧的に語られたあと、先生がそれも冗談ふうにいへられた言葉を私はいまだに忘れない。それでは私も群大で解剖して貰ひますかね。――

私が大学村の安東さんの電話を受けとるや否や、反射的に群大の台さんに思ひ走せ、往診を依頼した心理には以上のいきさつが電光のやうに閃いたのであつた。さてそれで日記にかへるとかう書いてある。

……台さんが行つてくれるのは明朝になる。いまの場合他に手の打ちやうはないが、まだどこまでも秘密となつてゐるにしても、私の一存だけで取りしきつたことには責任を感じるの、とにかく唐木さんだけにはと思つて電話する。彼の沈痛な驚ろきが受話器の底にひびく。さうして京都の西谷さんには知らせたく、大島康正氏にも黙つてはゐられまいが、彼は胃潰瘍で入院して暮れに家に戻つたばかりで、急を聞いてもまだ身動

田辺元博士の思ひ出

きが出来まいと思ふとのことで、とにかく、明日の往診の結果によつて第二の考慮をめぐらさうといふことで電話をきつた。

一月三日 火 晴

台さんは早朝群大の医科の白倉さんといつしよに北軽に行つてくれたとのことで、報告の電話が昼過ぎにかかつて来た。先生は脳軟化症、血圧二百四十、意識には狂ひがない。今度は一応をさまるかも知れないが、今後必要によつて往診の約束をしたといふ。大学村の事務所からでもかけてゐるふうで、そばから安東さんも言葉を挟んで、先生が台さんの行つたのをひどく悦ばれたことや、自分たちも及ばずながら御世話をするをいひ添へたが、この病気で一番困まることの処置について先生がひどく気兼ねしてゐなざるらしい。といつて看護婦は興さまの御病気の時でもさうであつた通り決して入れようとはしないだろう。私はお千代さん一人では大変だらうから、栗平の実家から誰か手伝つて貰ふやうにといひつめた。

唐木さんに以上の報告を電話する。唐木さんからは西谷氏へ知らせることの相談。それに対して私は、内証にする筈のことを私自らの計らひであなたに洩らしたのだから、その他のことはあなたの考慮に任せると返事したが、ただ大島さんには病後の無理をさせないためしばらく伏せておくことになつた。

一月四日 水 雨

朝、唐木さん来訪。また咳のぶり返して見苦しい病衣のまま、やつと茶の間のこたつに降りてお目にかかる。すべて先生の病氣についての話。

一月八日 日 晴

昨春からフランスのオルセの研究所に行つてゐるMのところへ、間もなく出掛ける正子の支度のために一緒に買ひ物にて、まだ本統でないからだになほも疲れ果てて夕方近く帰宅したところへ、留守中に台さんから電話があつたといふ。驚いて前橋にかけて、今日先生からの要請で二度目の往診をしたことを知る。先生はやや悪化された。言語障害が現はれ、麻痺の度も増加した。血圧は薬で下げてはあがるが、それにも絶えず細かい処置を要するので入院を勧めた。東京までは寝台車でも五時間余で少し不安であるが、前橋までなら二時間半でおつれ出来る。とにかく私に相談の上で決定するやうに話してあるとの言葉で、私はもとより前橋を飛び、すべてを台さんに一任した。もし内科が満員で個室があいてない場合には、彼の精神科の方の病室を使ふ。こんなうち合せまでして、明日群大から迎への寝台車を北軽へだして入院と決定した。

前橋の電話がすむと私は早速南林間の唐木さんにかける。またかうなれば公然のこと故それぞれにお知らせすること、唐木さんは大島さんにも伝へて明日は二人で群大へ出向いてくれることになつた。

一月九日 月 小雨

午後台さんから電話、先生の入院はいろいろ支度の都合で明日になつたとのことである。唐木、大島両氏は今日のつもりで出掛ける予定故、もしまだ発つてゐなければと思ひ、南林間は特急にしても通話に時間がかかるからまづ大島さんに電話す

る。ところで大島さんは抜けられない会合に出席してをり、前橋行きは一度帰宅してからのと奥様の言葉なので、入院は明日に延期されたのを伝へてくれるやうに頼み、つづいて南林間にかけると、唐木さんはすでに午前中にたれたといふ。私はまだとまらない咳を通話に挟みながらさむぎむぎむぎみぞれめいた雨を窓の外に眺め、北軽はたぶん雪であらうと思ふにつけ、厳冬の山路を寝台車で運ばれてくださる先生を、一と月と十日まへにお別れた時かりそめにも考へられたらうかといまさらに暗い不安に閉された。

記録は正しくは伝はりにくいものである。そのことは心得てゐたつもりながら、ここ数年來必要があつて或る時代とそれに関係のふかい二、三の人物について調べてゐるあひだに以前にも増して痛感されるやうになつた。ソクラテスの死にはもとより多くのドラマタイズがあるにしろ「パイドン」で想像がつかなくはない。しかしあれほど高齢を保つたプラトンは一休どんな病気で、どんな死方をしたのであらう。側近者の記録でも残つてゐたら私たちは今日でもはつきり知ることができたはずである。先生の御病氣や御臨終にあやまりのない記録をとどめた気が強くなるのも、ひとつはこんなおもひからに外ならぬ。また群大病院に移られてからのことは諸君子がそれぞれに書きとめておありのことと信ずるので、私はたまたま自分で果すことになつた役割りの報告書のつもりで、私記をも願はずあえてここに公表をしようとするのである。